

会員の広場



山の不思議な話

須山 茂樹（東京）

「二人の山男が吹雪の夜、無人の山小屋にたどり着いた。男が真夜中ふと目を覚ますと、連れが裸で震えている。聞くと、鳥打帽を被ったメガネの男が寝袋の上からすごい力で押さえつけ、寒いから洋服を貸せと言い、とうとうパンツ1枚にさせられたとのこと。翌日

里人にその話をすると、前年そのような男がその小屋の同じ場所で凍死していたのが発見されたと教えてくれた」。

「仲間たちと荒れた山小屋にたどり着き寝たが、夜中目を覚ますとロウソクの火が灯っている。確か消した筈だがと消して寝、また目を覚ますとロウソクが点いている。ゾツとして見ると、ロウソクは燃えていて短くなる筈なのにだんだん伸びてくる。大声に起き出した仲間と震えながらジリジリと燃えつつ伸び続けるロウソクを朝まで眺めていた」。

これは「山の不可思議事件簿」（山と溪谷社刊）に載っている「実話」である。

中学生の時、兄に連れられて東京近郊の小山に登り、山に魅せられた。兄はザイルを担

いでよく谷川岳などに出かけていたが、私は体力に自信がなく命も惜しいので一般路の山歩き。山の思い出は美しく、感動に溢れている。尾瀬ヶ原で仰いだ満天の星空、小屋の主人が日本一と自慢した北穂高岳の夕暮れ、南アルプス北岳の山頂近くで野営した翌朝目の先の濃霧に映ったプロッケンの巨像、剣岳に登った帰路粗末なトロッコ列車に揺られて眺めた黒部峡谷の威容。そして春浅い八ヶ岳山麓の落葉松林、萌え始めた若芽に霧の水玉がついて朝日にダイヤモンドのようにキラキラ輝く。つくづく恋人と歩きたいと思った。

最後に私の体験を。「その夏の日私は友人と後立山連峰を縦走、最後の針の木岳の急峻な路を下っていた。と、やや平らになった所

で二人連れの女性に声をかけられた。見ると山の服装ながら、若く容姿端麗。彼女らはいない湿原がある。お花が綺麗で私たちはもう一度行きたいと思っている。ご一緒にどうか」と誘う。私と友人、独身の二人は顔を見合わせた。しかし日暮れは近い。悔し涙を呑んで断り、帰りを急いだ。道々話していると、釣り落とした魚は何とやらではないが、彼女たちがますます美人に思えてくる。もし付いて行ったら…。命を失ったか、それとも高山植物のお花畑に感激して、彼女たちと仲良くなり、今の妻とは別の女性と全く違う人生を過ごすことになったか。これは不思議でも何でもない、妻には言えない昔の話である。